

「生家の蔵写っている」

本紙八月三十一日付の夕刊三画「戦後50年Photoメモリアル」に掲載した、終戦直後の一面焼け野原の下町地区の空撮写真を見て、狛江市の池田孝子さんが「生家の蔵が焼け残って写っている」と電話をくださった。この蔵は、なんと関東大震災(大正十二年)でも焼け残ったもので、当時の写真もあるとか。東京を襲った一度の災禍にも生き延びたこの蔵の物語を、アルバムを見ながら池田さんに聞いた。

# 震災、大空襲にも耐え

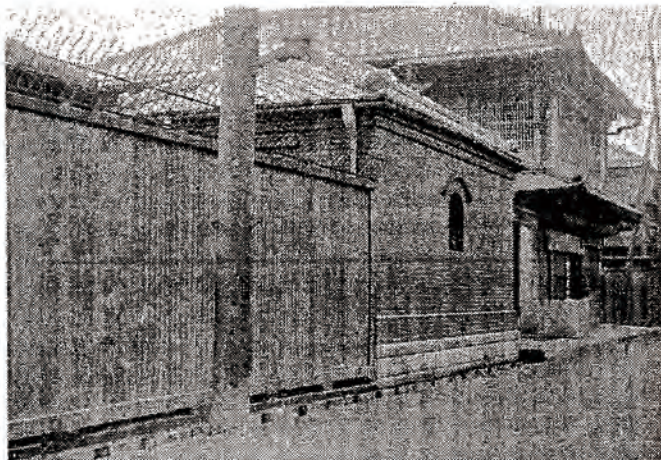


2度も焼けた下町  
ある『蔵』の物語



## 狛江の池田さん 本紙に連絡

池田さんの生家は、現在・大横川親水公園の間に、ようになったという。の黒田区石原町にあった。広い敷地を持っていた(地「まさだ醤油」しょうゆ味 図参照)。江戸時代からの、船が運んできた味噌や、噌(みそ)店。当時は横川 旧家で、明治初期は「鉾山 醤油をそこにしまつて、町といひ、横川小学校(現 司御用銅吹屋)だったが、イゲタ松、という商品名在の錦糸(孝)と横川(同)その後、味噌・醤油を扱うで売っていました(池田



①は、本紙8月31日の夕刊に掲載した終戦直後の写真(米国立公文書館保存写真。米空母「エセックス」の偵察機撮影)。円内が焼け残った蔵。

②は関東大震災で焼け残った蔵(左端)。手前の石材は、焼けた母屋に使ったのを片付けたもの。

③は関東大震災で焼ける前の店。蔵はこの裏にあった(この2枚は池田さん提供)。

その後この蔵は、東京大空襲(昭和二十年三月十日)でも焼け残り、後から池田さんが聞いたところによれば、昭和五十年前後まで建っていたが取り壊されたこと。

関東大震災の時は蔵の入り口の扉を閉めたので、中のは素焼きになったもの助かった(同)この時、母屋を含め周囲一帯は焼けてしまい、当時四歳の池田さんは子守におんぶされて家族とともに錦糸町駅に逃げた。そこで一大勢の人が避難して集まって、ガヤガヤしている所へ真っ黒な(火事の)旋風が襲ってきて、それが通り過ぎたら人の声がしなくなつた。雨戸が風(た)のよつにたぐさん空に舞っていた。私たちは隅にいたので助かったけれど、あそこでたぐさんの方が亡くなられたとか(同)という体験をする。この大災害の後、この地で商いを再開したが、昭和十年代に建物ごと売り払った。

焼け残った蔵は大正時代の初期に建てられたもの。二階建て、レンガ造りで母屋とは廊下続き。風風びようび、掛け軸など大事な財産をしまつていた。